

こころの健康

こどもの心と大人の社会

その5 発達障害と社会の不寛容

千葉県こども病院 あんどう さきほ 安藤 咲穂 医師



発達障害は増えていると言われています。しかしその原因については諸説あるものの、決着はついていません。もっとも有力なのは、診断技術の向上による発見数の上昇ですが、これとて近年の爆発的増加を充分に説明することは困難です。

病気はある時「発病する」ものですが、発達障害は原則的には生まれ持った特性なので、途中から発病する訳ではありません。幼少期には気づかれなかったものが、幼稚園や小学校に上がって集団生活になじめないことから気づかれることも多いのです。福祉の分野では問題があらわになることを「事例化する」と言いますが、本人は元から同じように振る舞っているのに、事例化してしまう要因はどこにあるのでしょうか。

話は変わりますが、昨年世界には大きなニュースがありました。イギリスのEU離脱とトランプ大統領の就任です。経済的思惑もあるのでしょうか、排他主義的な考えは穏やかではありません。わが国でも、生活保護受給者へのバッシングや被災者いじめなど様々な影の部分が見え隠れします。

世の中、寛容さをどんどん失っているようです。

発達障害の人もこの不寛容に曝さらされています。幼稚園、小学校と同じメンバーで過ごし、周りの理解もあつてうまくやれていた人が、中学上がった途端に事例化してしまうケースがあります。それは、ついでに列を乱してしまったり、大雑把すぎたり、融通が利かなかつたり、という理由からです。しかしそれらは、いずれ成長すれば改善が期待できます。それを待つてあげる度量を社会が持ち合わせていれば、事例化せずにもつことも多々あるのです。発達障害は増えているのではなく、余裕のなくなった社会からあぶり出されているということかもしれません。

私は医者ですから薬物療法を否定はしませんが、薬物だけで解決する訳でもありません。可能性のある、あらゆる手段を用いるべきで、その一つとして「配慮」という環境整備は大切です。皆さんも、ご自分がギスギスし過ぎていないかチェックしてみたいかがでしょう。